

アートは、ひとと交わって、楽しい

角和昌浩

引退して時間がいっぱいあるのでアートをやっています。陶芸と水墨画の2つの分野で、それぞれに楽しく社交できれば、と願っています。

まず、大事なお師匠さんのはなしから。

年齢を重ねても、いつまでも、師匠を持ちたい。師匠はわたしに持っているものを惜しげなく渡そうとし、わたしは師匠にほめられるとうれしいもので自宅に戻って精進する。弟子はお師匠さんを尊敬し、ときには付け届けをし、師匠が個展をやるといので会場に足を運ぶのだ。師弟とも、70歳を越えれば穏やかで寛容な交わりになる。

陶芸の師匠には30年近く教えていただいている。師匠はだいぶん前、故郷の吉野川上流にアトリエを造って引っ込んでしまった。だから手を取って教えてもらえないのだが、遠方からアドバイスをいただく。

陶芸の師匠 森本修先生の花器

正確なロクロ、端正な陰刻、失透釉薬の
ノリが素晴らしい

師匠はろくろ成形の名人として聞こえていて、ときどき外国のアーティストと共同制作をする。去年はどこかの紹介で、吉野の山奥のアトリエにコートジボワールの画家が入ってきた。フランス語のひとで師匠には全く分からないのだけれど、共同生活をし、コラボできて友達になって、青山のギャラリーで作品のお披露目をした。けれど、上京してきた師匠は、青山の界限に、まったくなじまない風情なのだった。

「自分は来年80歳を越えるので、車の運転を諦める、取手にある妻の実家が空いているのでそこに隠居する」



「先生、取手で陶芸をつづけるのですか？」

「いや、きっぱりやめるのです。ネギをつくりたい。実はわたしは畑でネギを上手に作れるのです」



森本修先生作 大型ダラブッカ

ダラブッカは中近東由来の太鼓で、素焼きの陶器の胴体にヒツジの薄皮を張る
掌で真ん中を叩くと、くぐもった音が抜け、
指の関節で縁の陶器を叩くと、高音をはる

演奏は永田充さん

日本人の演者がいるのだ

水墨画の師匠との交わりはまだ浅い。ずっと習っていたお師匠さんが高齢になり、筆を置き、画塾を後輩に託した。わたしは前の師匠と立派な中華料理店に行って、長年のお礼を述べました。

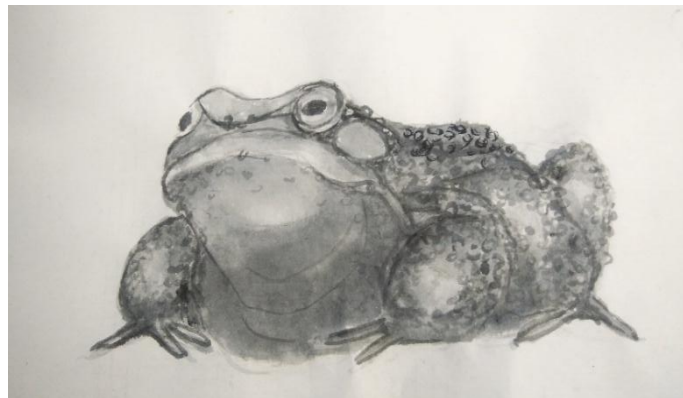
新しい師匠は福々しい女流画家で、旦那様と共に牧師館を切り盛りするクリスチャンだ。花や樹、自然をモチーフにされる。

わたしは自分が描きたい画稿を持って行ってコメントをいただき、同時に、師匠がその場で描いてくれる手本を持ち帰って、自宅でおさらいする。

花の咲き方や形態を、何枚も、正確なデッサンを作ってその本質を掴み、それから筆を取って、一気に描く。とても新鮮なのだ。

我家の庭に棲むガマガエル

今年の春も冬眠から出てきた。なんだか一緒に人生を歩いている気がする。



わたしの画塾では、どこもそうなのだけれども、女性の生徒さんが多い。やはり画題と筆墨の使い方には性差があり、わたしは塾の中で浮いてしまう。

気になる方もおられるから、いつか、50年前に戻って、勇気を出して「よかったら、お茶しませんか？」と声をかけてみたい。



最近作ったもの

たらし込み技法を試した抽象作品

でき上がるまで諦めず、でき上がりが失敗でもいいから、最後までやってみるんです。

そうしたら、だんだんと、何とかなってきた。

日本の作家の水墨画は、今、海外で人気で、お師匠さんもイギリスやパリで個展をなされた。わたしが年一回出品する展示会には、外国人観光客が、フリーで、ずいぶんと入ってくる。入場無料だからでしょうか。

残りのスペースで、陶芸アトリエでの交わりを書きます。

千葉県我孫子市の自宅にアトリエを作って6年になります。窯設備を持ったので、このアトリエで焼きものの仕事が完結できます。

教室ではないので、友人知人に限って遊びに来ていただく。現在20人内外が出入りされています。

昭和シェル出身の方は原則歓迎ですので、どうぞ、お声がけください。

現役で仕事をしている人たちは2か月に一度くらいしか来れないから、なかなか上達しないのですが、アトリエに来られて、すごく集中して何時間も土と遊ぶと、断然、スッキリするようです。

陶芸、特にロクロの仕事では、作り手の脳神経と手指が、直接つながっている。だから精神的に疲れているときにはロクロがうまく引けない。そんな状態の方には、手びねり、という、粘土を握ったり積み上げたりする作業を勧めて

います。これは正真正銘の手あそびで、湿った粘土の感触がこちよく、まことに無心に還れます。



陶芸アトリエの風景

ご存じの方が座っておられるかも
前掛け姿がわたし

皆さん、窯から出てきた作品を大切にされます。なにしろ世界にひとつしかない造形ですから、貴重です。

酒器作りが人気。酒は、どんなかたちのうつわにも注げます。何か月もかかって自分の手でこしらえた器だから、酒がおいしい。こうやって日々の生活を、豊かに、飾ってゆくのです。



上は釉薬の掛け合わせを頑張った
手びねりの作品群
それぞれが宝石！



左はロクロ手で、鉄絵のアクセント
男性好みの大ぶりの盃

(角和昌浩)